

南方（南洋諸島）

南海ムンダの戦い

（ニュージョージア島）

静岡県 佐野 弘

私は大正十（一九二一）年生まれで長男です。弟が四人、姉が二人います。父は私が十七歳の時に病気で亡くなりましたので八人家族です。私は東京の蒲田で軍の戦車の「キヤタピラ」を造る工場で電気関係の仕事をしておりました。

徴兵検査は昭和十六（一九四一）年で第二乙種でした。昭和十七年三月、召集令状が来て静岡県浜松の高射砲第一連隊（中部第七十二部隊）に入隊しました。教育召集でした。

同年七月に召集解除されて家に帰り、元の会社へ復職しましたが、三カ月後の十月に再び召集令状が来て、同じ高射砲第一連隊に入隊しました。南方行きが予想されました。召集された兵隊は既に二回、三回と令状を貰った者が多かったです。

す。ちょうどその時、私は風邪を引いていましたので軍医少尉の診断では「帰れ」と言われ、困ったなあと思いましたが、軍医中尉が

「風邪だ、大丈夫だ」と言われ即日帰郷は免れ「ホッ」としました。

当時の状況では「帰された」は大きな恥となり顔向けできないことだったので。兵隊の中には帰して貰いたいために、わざと気違いの真似をしたり、馬鹿なことをする者もいたなんて情けない

と思いましたが。徴兵忌避がひそかに広がりつつあったのです。

昭和十七年十月に入隊して、五日程して浜松へ出発しました。残った兵から「お前達は台湾へ行くまでに、どうせ沈められるぞ」と頭から言われケンカになりました。

宇品まで列車で輸送されましたが途中、窓の鎧戸を降ろさせられ、祖国の風景も見られず、すぐ大きな輸送船「英蘭丸」に乗せられました。船には既に飛行機の部品がいっぱい積まれていました。その上に兵隊が乗り込みました。高射砲は一門もありませんでした。

後で判ったことですが、私達はニュージョージア島のムンダにある野戦高射砲隊の補充要員だったのです。携帯した物は救命胴衣と巻脚絆だけで、救命胴衣は常時着用するよう命ぜられておりました。帯剣も銃もありませんでした。いずれにしても前途多難を思わせるものでした。

「英蘭丸」は僚船二隻との船団で、海軍の護衛艦は一隻も無いという心細い船出でした。宇品を出て幾日か判りませんが、南進することしばらくして、気温は日増しに上昇し、十月末頃赤道を越えた祝いに赤飯が出され「赤道祭だ」と言われました。

久しぶりの赤飯を食べ終わった頃、上官から「佐野は船尾の対潜監視をやれ」と命ぜられました。船尾に行つて「佐野一等兵、対潜監視に参りました」と言つたが、上等兵が「せっかくだが人員が一人余るので帰つてよろしい」と言われ、元の船首に戻り上官に報告しました。

これが私の生死を分けるとは夢にも知りませんでした。私が元の場所に戻り腰を降ろすや否や船尾の監視哨の「魚雷発見！」の絶叫と同時に、物凄いい音と水柱が立ち、監視哨の姿が消えて、砕かれたスクリューが冲天高く吹き上げられ、船全体が地震のように揺れました。続いて二発、三発と魚雷が命中しました。船は次第に沈みはじめまし

た。

「筏を投げよ」と救助用に積んであった広さ畳四帖半の大きさの竹で組んだ筏が海へ投げ込まれたが、運の悪い兵隊は、その下敷きになり、再び浮上しませんでした。「総員退去！」が号令された時は、ほとんどの者が海中にいました。将校は救命ボートに乗り、救いを求めてボートに近寄る兵隊を軍刀で追い払っていました。

私は幸い西伊豆海岸の生まれですから泳ぎは得意でしたので助かりました。腰の巻脚絆をほどいて筏にくくり付け、体を浮かして筏にすがりついていました。

僚船は一旦逃げましたがしばらくして救助のため戻ってきて救助活動を開始してくれましたので海に入って五時間位で救い上げられました。

「救いにきてくれたぞ！」の声を耳にした時は本当に有難いと思いました。沈没してから救い上げられるまで約五時間という短い時間でしたので、死んだ者は被雷した時に船尾にいた監視哨の人達

だけだと思えます。いずれにしても幸運に恵まれました。救われてから「アゴ」がヒリヒリ痛いので戦友に見て貰ったら、救命胴衣の上端が「アゴ」にこすり、傷がついたことが判りました。

海中に在る間中腕時計のことが、気になっていました。海水に浸かると止まってしまおうので懐のポケットが良いかなあーと思っていました。後から考えたら、頭の上において帽子をかぶっておれば濡れずですんだのになあと悔やんだが後の祭、海水に浸ったので四時十七分で止まっておりました。

僚船に助けられた私達はラバウルに送られ、人員点呼しましたが、何しろ入隊してすぐ船に乗せられ現役兵なら教育期間が半年間もあるので顔も覚えるでしょうが、召集されてすぐ船に乗せられたので名前も顔も覚える暇がないので、誰が居なくなったのか、判らず仕舞でしたが、救いの手が

早かったので最小限の損害ですんだようでした。

ラバウルで二、三日経って今度は、駆逐艦三隻に分乗してラバウルとガダルカナルの中間にあるコロバン島に向かって発進しました。

駆逐艦の名前は確か「三日月」「長月」「五月」だったと思います。

一回目は米軍機の空襲を受け一旦ラバウルに戻り翌日の夕方四時頃再びコロバンに向けて出発、真つ暗闇の中を着岸、陣地内で休んでから上陸用舟艇でニュージョージア島の西端にあるムンダに向かいました。

「やられるから、しゃべるな」と言われ、翌朝ムンダに上陸しました。

そこで私達の運命を握る野戦高射砲の部隊に転属になったのでした。

高射砲は僅か一門がジャングルの中に隠されてあるだけでした。以前は海岸に陣地があったようですが、爆撃と艦砲射撃で全滅状態になったよう

です。隊長は召集の人で、私利私欲にたけ、自己の保身に欲々で、とても隊長の資格など全く無い人でした。

食糧は自分が管理していて部下の事など全然考慮なし、全くあきれた隊長でした。空襲があると防空壕の一番奥に自分が真つ先に入る始末でした。僅か一門しか無い高射砲を高地の頂上に引き上げさせ、ジャングルの樹を伐つて周りに立てさせ、カムフラージュした積りでいました。

ムンダ飛行場がすぐ近くにあり日本の飛行機が飛び立っていました。また近くに飛行場設営隊もおりました。ガダルカナルへ爆撃に行った帰りの飛行機が翼を振って着陸するのを何度も見ました。昭和十八年七月初旬に、米軍がニュージョージアの東岸に上陸する頃になると、ムンダ飛行場から日本軍の飛行隊は撤退して、今度はラバウルから飛んで来て空中戦をやるようになりました。日本軍機はやられても必ず米軍陣地に突入自爆し

ていました。

私は高射砲隊の観測兵でした。朝早く米空軍のロッキードが「キーン」と金属音を立てて観測に来ますと、四十分後には必ず爆撃機が爆撃に来ます。

「敵機〇機、航速イクラ、高度イクラ」と、私は砲に通報、「信管イクラ」と知らせても砲の方は中々信管を切ることができない（慌てるから）。だから途中で破裂して敵に命中しない。

ムンダの海岸に高射砲隊の炊事場がありました。ある朝、六月中頃と思います。私は起きて海岸を見ると敵艦が三隻並んでいるので吃驚して山の上の本隊に知らせました。しかし「そんなことない」と軽く受け流されました。それならと炊事場の連中を起こして「アメリカの軍艦が来ているぞ！」と怒鳴ると、皆吃驚して防空壕に頭を突っ込んで逃げました。しかし二、三日経っても撃つて来ないし上陸もしてこない。

そのうち四日目位から艦砲射撃が始まり、ジャ

ングルをきれいに吹き飛ばしてから飛行場作りを始めるという用意周到さに恐れ入ったものです。日本軍なら敵前上陸して肉弾突撃が定石だろうに。

僅か一門の高射砲では戦争になりませんでした。下手に撃とうものなら忽ち砲の回りは砲撃で裸同然になります。ジャングルの樹を切ってきて陣地の周りに立てるのが兵隊の仕事です。

次第に米軍に押されて、西隣のコロバンガラ島に後退しましたが「飛田上等兵が両手、両足を飛ばされて、ダルマさんになって死んだ」と知らされました。

私も砲弾の破片が腰に当たり打撲傷を受け、また破片が胸をかすめて負傷しました。この辺の樹の根は高く、人が隠れるに格好な場所で、戦友と二人で隠れた時に飛田の様子を詳しく聞かされました。

負傷して野戦病院に入りましたが名ばかりの施設で、立木の枝葉を切り払った丸太を横に並べた

だけの病院で、軍医も衛生兵もおらず、手当は勿論、食事の世話も無く、手足の動く者が近くの植物を炊いて食べているだけの病院で、動けぬ者は食べることもできぬ有様でした。このような所が山のあちこちに散在していて治療などは当てにならない有様でした。

軍医が「早く海岸まで行け、這つてでも行けよ」と教えてくれましたが、食う物は無く腹ペコ、足は三〇センチも動かさず、手と膝で四つんばいになつて必死に海岸を目指しました。どの位這つたのか分かりませんがようやく海岸にたどり着きました。小船に乗せて貰い沖で待機している駆逐艦のそばに着きましたが、新しい駆逐艦なのか網梯子が舷側に垂らしてありますが見上げる程の高さでした。網に手を掛けたが、よじ登る力がありません。上から「早く上がってこい」と励ましてくれますが網にすがりつくのがやつと、とても登る力がありません。

そのうち上から「ロープ」が下がってきて「こ

れを腰に巻きつける」という。そしてようやく腰に巻きつけたら一気に甲板まで引きずり上げられました。

「のど」がカラカラに乾いていたので水を飲むうとしたら他の兵隊に叱られて飲めませんでした。ラバウルに上陸して点呼の時は人事不省になり何も判らなくなつてしまいました。

病院に入れられた時、静岡県出身の看護婦さんが「佐野さんが死ぬかと思った」と言われました。そこで元気になるまで入院していました。ベッドに横になると、負傷したお陰で助かったとつくづく思いました。

元気な者はいつまでも戦場に残されるのが軍隊ですから生きて帰れないと思いました。私は運が良かったとつくづく思います。患者は優先して還送しましたからね。病床で思い出されるのは母親だけでした。死んで行く者は母親の名を呼んで死んでゆきました。

戦争に行く時は喜び勇んで出た私ですが、傷ついて床に伏す身になると戦争なんてするものじゃないと痛感するようになりました。

ラバウルに行けば何が食えるかなあと思っていたら、なんとマンゴーが腹いっぱい食べられました。羽を広げたら一メートルもあるコウモリがマンゴーの実を突いて落ちたのがゴロゴロしていました。

やがて病院船「ブエノスアイレス丸」が入港、それに乗せられ比島のケソン病院へ、そこで二週間いて台湾の高雄に入り、続いて台南の陸軍病院に入院、昭和十九年九月「橘丸」で姫路の陸軍病院に転院しました。

山本五十六大将の飛行機が落とされたことはラバウルで聞きました。戦の前途に暗雲が立ちこめたような感じを受けました。

「ブエノスアイレス丸」は私達を比島に送った帰りに潜水艦にやられたそうで、ショックでした。この船は病院船でしたが看護婦の姿はありません

でした。衛生兵は見ましたが……。

平成十六（二〇〇四）年九月初旬、NHKのTVで戦時中の輸送船が全部放映されたと病院に入っている妻が教えてくれましたが、お世話になった輸送船の在りし日の姿を一目見たかったと思いました。

この文章が「平和の礎」に掲載されたら全国に散在する戦友の目に触れ、私の許に電話でも手紙でもいただけたら有難いなあーと思っております。姫路の病院に一週間いて退院、二日間どこかの部隊にいて除隊となり、伊豆の我が家に帰り、家族と対面、特に母親には夢にまで見ましただけに本当に嬉しかったです。

家の者が皆元気だったのが何よりでした。私の傷も治り東京に一旦出ましたが、空襲も激しくなりましたので故郷の土肥に帰りました。

土肥の町でも、戦中はサイパンからの空路の下に当たり、B 29の補助タンクの大きいアルミ缶が山中に落とされたそうです。空襲の通り道になる

ので残りの爆弾が落とされたともあったそうです。

南方飢餓戦場

山梨県 奥 隆行

私は大正十（一九二一）年三月三十一日、山梨県南都留郡谷村町下谷において出生。昭和十七（一九四二）年四月、早稲田大学商学部三学年に進むと「九月繰上げ卒業、十月一日入営」の発表があり、近衛第一連隊に入隊しました。

江戸城の名残を留める田安門を入ると、中はこんな広い所があったかと思うほど広大で、入って左に将校集会所がある。現在の武道館が建つところである。内務班のことや教練・演習のことは省略する。

入営十カ月もすれば下士官になる幹候を、目の仇にされるようなことはなく、程度の良い近歩一連隊には「幹部候補生だから頑張れ」と気合を入れられはしたが、幹候だからといって特別不当の扱いを受けたことはない。